

エネルギー防災寄附研究部門活動報告会を開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、4月19日(金)、環境総合館レクチャーホールにおいて、エネルギー防災(中部電力)寄附研究部門の平成24年度活動報告会を開催しました。同センター及び同寄附研究部門の関係者のほか、学生など約70名が出席しました。

初めに、福和減災連携研究センター長からあいさつがあ



報告会の様子

り、次に、宮池克人中部電力株式会社代表取締役副社長より来賓あいさつがありました。

続いて、同寄附研究部門から3件の報告がありました。まず、武村雅之同寄附研究部門教授より、エネルギー防災寄附研究部門のミッションの説明と、近代的な観測機器がなかった時代の地震である歴史地震などの研究成果報告があり、「歴史は唯一無二の指標」であることから、減災・防災のためには歴史地震研究が重要であることが示されました。次に、都築充雄同准教授より、社会連携に関する成果報告があり、自治体や企業との連携だけでなく、この地域の将来を担う若手技術者とも連携するなどの積極的な取り組みについて紹介がありました。

さらに、虎谷健司同助教より、経済被害予測手法の調査結果報告があり、地震後の電力需給ギャップ解消のための取り組みが紹介されました。

最後に、服部邦男中部電力株式会社土木建築部長より報告会に対する講評があり、同寄附研究部門の活動への期待が示されました。

ライフライン地盤防災寄附研究部門活動報告会を開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、5月10日(金)、環境総合館レクチャーホールにおいて、ライフライン地盤防災(東邦ガス)寄附研究部門の平成24年度活動報告会を開催しました。同センター及び同寄附研究部門の関係者をはじめ約100名が出席しました。

初めに、福和減災連携研究センター長からあいさつがあ



報告会の様子

り、寄附研究部門が大学の中と外をつなぐ役割を担うことへの期待を述べました。次に、同寄附研究部門からの報告として、北野哲司同寄附研究部門教授より寄附研究部門の1年間の活動報告と液化化被害想定の高高度化等の研究について、宮腰淳一同准教授より南海トラフ巨大地震の被害想定における強震動の予測手法と内閣府の予測結果の解釈について、野中俊宏同助教より地盤や地中構造物に対する地震応答解析結果について、紹介がありました。

続いて、欽田泰子神戸大学大学院工学研究科准教授より、ライフライン地盤工学の現状と課題についての基調講演があり、東日本大震災のライフライン被害をふまえて、今後のライフライン防災はどうあるべきかという説明がありました。また、野田減災連携研究センター副センター長より話題提供がありました。

最後に、中村 修東邦ガス株式会社取締役常務執行役員より同センター及び同寄附研究部門への期待を込めたあいさつがあり、鷲谷 威同センター教授より報告会の講評が行われました。

第89回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、4月24日(水)、環境総合館レクチャーホールにおいて、第89回防災アカデミーを開催しました。今回は、松本発達心理精神科学教育研究センター長による講演「心の減災入門～備えあれば心は健康～」が行われ、90名の参加がありました。

松本センター長からは、初めに、東日本大震災において



講演する松本センター長

被災地外の子どもがニュース等の映像から受けた心理的影響について事例の紹介があり、災害が心に与える影響の大きさが説明されました。また災害について「自分は大丈夫」「今回は大丈夫」と考えてしまう心理的反応「正常性バイアス」について説明し、災害時に受けるストレスへの心の反応について知っておいたり、普段から災害時の状況をイメージして準備をしたりする「心の備え」が重要であると紹介しました。

会場全体でリラクゼーション法である「10秒呼吸法」の実習を行った後、質疑応答が行われ、教育関係者の参加者を中心に「心の教育」についての活発な意見交換が行われました。

大学生のメンタルヘルスに関する日仏学術交流会を開催

●総合保健体育科学センター

総合保健体育科学センターは、4月23日(火)、ES 総合館において、大学生のメンタルヘルスに関する日仏学術交流会を開催しました。

同交流会は、内科医であるコリース・クララック ストラスブール大学予防医療部門所長と精神科医である同大学医療心理受け入れセンターのステファニー・ヌヴィエール

氏をフランスより迎え、「大学生の自殺対策」というテーマで開催されました。

両氏からは、現代において、フランスの大学生が抱えている心身の不安定な状況に関する具体的なデータや、それに対してストラスブール大学でなされている試みについて説明があり、主催者側からは、日本の大学生の状況についての話題提供がありました。

ストラスブールでも、名古屋市と同じような「命の電話」に相当するシステムが機能し始めているという話や、個人主義の強い傾向のあるフランスにおいて、死にたいという気持ちがあるにもかかわらず治療を拒否している青年に対して治療者が介入することには、いかなる問題があるのかということについて論究されました。

交流会の後半では、現代の社会において自殺対策として何が可能であるのか、あるいは、現代における社会変化と青年とはどのように関係しているかなど、様々な観点でディスカッションが行われました。



記念撮影